信州読書会　YouTubeLive&ツイキャス読書会

課題図書　谷崎潤一郎 『幇間（ほうかん）』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
（募集要項はメルマガでお伝えします）
また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会　ツイキャス　http://twitcasting.tv/skypebookclub
YouTubeLive　https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw
『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから　http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284
『ツイキャス読書会』 音声のバックナンバーです。
https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf
（各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。）

谷崎潤一郎

『幇間（ほうかん）』

第 262 回のツイキャス読書会の課題図書は、谷崎潤一郎先生の 『幇間（ほうかん）』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

青空文庫　谷崎潤一郎 『幇間（ほうかん）』

朗読しました。

メルマガ読者　さくらさん

『幇間』 感想文

最初の花見の船での様子がとても華やかで、すごく浮かれた感じが伝わってきました。

ろくろ首の変装のがちょっと想像するのが難しかったのですが、きっとその場で見ていたらすごく楽しいのだろうなと思いながら読みました。

華やかで楽しい場面が多くて面白いなと思ったのですが、だんだん読むうちに三平という人の本当の心というかい気持ちはどうなんだろう？　と少し不気味な感じがしました。

梅吉が好きだから催眠術もわざと掛ったふりをしていたのは、なんとなく最初から分かっていたのですが、何をしても怒らないし、そういう人もいると思うけど、どうなのかな？　と少しもやもやしました。

好きな人には何をされても許せるというのはあると思うけど、なぜだか三平は少し怖く感じて、最後に何かあるのではないか？　と思っていました。

それは、梅吉と一晩何かあったのではないか？　と匂わせるのが唯一の仕返しのような気もしますが、でも三平が盛って話しただけだと皆は信用しないのではないかなと思う。

面白い作品だと思いましたが、でもよく分からない感じもして不思議な気持ちが残りました。

（おわり）

メルマガ読者　八王子ひげだるまさん

「大谷崎が描いたのは、日本人をつくった空気を含んだものだった」

（引用はじめ）

「其の日の朝の十時頃の事です。神田川の口元を出て、亀清楼の石垣の蔭から、大川の真ん中へ漕ぎ出した一艘の花見船がありました。紅白だんだらの幔幕に美々しく飾った大伝馬へ、代地の幇間藝者を乗せて、船の中央には其の当時兜町で成り金の名を響かせた榊原と云う旦那が、五六人の末社を従え、船中の男女を見廻しながら、ぐびりぐびりと大杯を傾けて、其の太った赭顔には、すでに三分の酔いが循まわって居ます。中流に浮かんだ船が、藤堂伯の邸の塀と並んで進む頃、幔幕の中から絃歌の声が湧然と起こり、陽気な響きは大川の水を揺がせて、百本杭と代地の河岸を襲って来ます。両国橋の上や、本所浅草の河岸通りの人々は、孰れも首を伸ばして、此の大陽気に見惚みとれぬ者はありません。船中の様子は手に取るように陸から窺われ、時々なまめかしい女の言葉さえ、川面を吹き渡るそよ風に伝わって洩れて来ます。」　　（谷崎潤一郎 「幇間」 青空文庫）

（引用おわり）

この部分は是非、Google マップで両国橋辺りの地図を見ながら読んで頂きたい。

「末社」「百本杭」などの語をそれぞれ調べていくと非常に興味深い事であるが、一々書いていくと長くなるので、一つだけ。

「代地」　参考リンク先の「日本歴史地名大系ジャーナル」の記事を参照頂きたい。

（引用はじめ）

「代地」「代地町」という名称は、江戸に特有の名称でした。

（中略）

江戸の町の 1 割近くを占めていた「〇〇代地」「××代地町」といった呼称は姿を消し（現在（2009 年）の東京都 23 区の町名には 1 つも残っていません）

（日本歴史地名大系ジャーナル　第 28 回　江戸に特有の町名、代地・代地町）

（引用おわり）

関東大震災により、江戸の風俗は急激に失われ、衝撃を受けた大谷崎は関西に移り新展開を得た。

大谷崎の作品は誇張された不自然な人間観によって、底の浅さを感じさせるものがあるが、大谷崎の興味は人間の内面そのものというよりも、人間を育んできた土壌。

人間を作ってきた空気をも含んだものにあった。

大谷崎の小説が海外で非常に評価が高いのは、例えば西洋人からみれば日本人の内面よりも、日本人を作ってきた土壌や空気に興味を惹かれるからで、これは日本人の個人としての精神性は幼稚とさえ言え、特に見るべきものがないにしても、日本の風土、文化、土壌は非常に特異なものだからである。

（おわり）

メルマガ読者　TOTO さん

『幇間』 谷崎潤一郎　感想文

春の川面の情景描写がすばらしくて、この序の部分の風情が、後に登場する滑稽な三平を更に際立たせた。

春のキラキラ、ほんのりあたたかい風、みな活気に満ちていて何かが起こりそうである。

「川の面は、如何にもふっくらとした鷹揚な波が、のたりのたりとだるそうに打ち、蒲団のような手触りがするかと思われる柔かい水の上に」(青空文庫)

ゆったりとした文章に目を惹かれる。

思いもよらない、蒲団のようなという表現。水にも厚みがあるようにゆっくり波立つ水面にも流れる穏やかな時間がある。
皆が望んだ平和な春だが、だるい眠気も感じてしまう。

日露戦争が終わり、民衆の安堵と喜びが生き生き伝わって来た。
お祭りのようなこの風景は、江戸時代の「元禄花見踊」という言葉を思い出させる。
皆、起こりうる時代の変化に胸躍る快活な民衆の姿がゾロゾロ目に浮かぶ。
作品の中の「粋」はいつも健在である。

人を笑わせることは、機転が利き相手への気遣いが必要であり、頭の働きがよくないと出来ない。
仲買店までやっていた三平の相場師の勘のよさが人を喜ばせる。
幇間の仕事にはうってつけであり、何より本人が一番望んで喜んでいる。
楽しければ良い無責任人生。

思い付きで三平に仕事変えをさせた榊原には、彼の将来などはどうでも良い、それがまた無責任であるのだが、三平はその場限りの可笑しさと何より人が喜ぶ姿を彼自身が観たいのだから始末に悪い。

現代の芸人は、表の顔と裏の顔がはなはだしく違い、ふとテレビなどに映ってしまった素の顔に驚く。

三平は裏も表もない。幇間という仕事を目一杯喜び楽しんでいる姿を、人々も自分より蔑みながらも利用し、後は何も考えないのが彼の特権である。

人を喜ばせ、しかし自分が一番喜んでいて、バカにされても、蔑まれても、それすら物ともしない。
だが、生活への道のりは厳しい。

「ホメラレモセズ、クニモサレズ」を自で行く三平である。
「サウイフモノニ　ワタシハナリタイ」がいつも頭に浮かぶが、到底なれない。

金さえ有ればすぐに散財、全てに欲がなく全てにだらしがない。
「道楽の真髄に徹し、快楽の権化」と思われる罪のない男である。

鈍感なのか、わかりすぎていて知らぬふりしているだけなのか、掴みどころがない。

最後の梅吉とのシーンは三平が騙したのか、梅吉が騙したのか、落語のオチのようで、終始でテンポの良さで流れて行った。

（引用はじめ）

「桜井さん」と呼び掛けて、自然と伴れのお客より一段低い人間のように取り扱いながら、其れを失礼だとも思わないのです。実際彼は尊敬の念とか、恋慕の情とかを、決して人に起させるような人間ではありませんでした。先天的に人から一種温かい軽蔑の心を以て、若しくは憐愍の情を以て、親しまれ可愛がられる性分なのです。

（引用おわり）

可愛がられる性分で、最も面倒臭くない人間である三平の遠い未来は見たくない。

（おわり）

メルマガ読者　エヴァタさん

明るい SM 噺

（引用はじめ）

不安や緊張、あくびといった動作は、伝染します。笑いもまた伝染しあうのです。（中略）笑いが心身の健康に良いとわかっていても、気分が乗らないと笑えません。笑いヨガのフォーマットに従えば、「おもしろい」「楽しい」という感情と、「笑う」動作を切り離すことができ、どんな気分でも笑えてしまうのです。確実に笑いの健康効果が得られることが実感できるので、継続がしやすく、身体も心も元気になります。　（日本笑いヨガ協会 HP　笑いヨガとは、より抜粋）

（引用おわり）

以前参加した某学術大会の特別セミナーで「笑いヨガ」の講演及び体験会があり、私も面白くもないのにアハハと大きな声を出して笑い、腹筋が働いていることを感じ、笑い終えた後は爽快感を感じました。落語を聞いて沢山笑って癌細胞が小さくなったという症例が実際にあるそうですし、臨床現場にいて、どんなに重い病気や障害がある方でも笑顔の見られる方は元気で、こちらまで元気をもらえます。
とすれば三平のような人が一家に一人は必要なのでしょうか？

（引用はじめ）

「お前さんのように呑気だったら、貧乏しても苦にはなるまいね。一生笑って暮らせれば、其れが一番仕合わせだとも」かみさんにこう言われると彼は得意になって
「全くです。だからわっしなんざぁ、昔からついぞ腹と云うものを立てたことがありません。それと云うのが矢張り道楽をしたお蔭でございますね・・・」　（青空文庫版 『幇間』 より）

（引用おわり）

「僕たち・あたしたち、一生笑って暮らしていこうね」だなんて誓い合って暮らし始めたラブラブキラキラカップルは本当に笑いの絶えない生活をし、相手を思いやっていられているのだろうか？
私はここ数年ほとんどテレヴィ番組というものを進んでみていないが、時たま画面に映ったそれからは出演者もスタッフも「なぜそんなことで？」と疑ってしまうことで大笑いをしている。笑いヨガの理論からすれば彼らは心身ともに健康なのだろうけれど、私はどうもそうは思えない。
そして道楽をして腹を立てない人間になるには、数多ある投稿動画をみたり、それにならって◎◎やってみた、を実践すればいいのだろうか？

最後に、三平はみんなに弄ばれるのが大好きなド M 君に見えて、本人がその素質に気づいているか定かではありませんが周囲を「弄んでいる」のではなかろうか？　と思いました。ヘンテコな言葉にノリ突っ込みをする私をみてゲラゲラ大笑いをしているわが子を見るのが好きな私も、幇間気質があるのでしょうか？　以上

（おわり）

メルマガ読者　千歳飴さん

怖いおもちゃ

私は今回、谷崎潤一郎の作品を初めて読んだが、子供の頃、アニメの春琴抄なら見た覚えがある。盲のお箏のお師匠さんが、小間使いの男をいじめていた。お師匠さんが悪代官みたいなやつにレイプされそうになるが、小間使いが助ける。最後は自分の目を針で刺して、お師匠さんと 2 人で生きて行く、というお話だった。針で自分の目を刺す部分が子供心に強烈だった。

今回の課題図書『幇間』を最初に 1 回読んだとき、私はぜひ夜の柳橋で女性数人で飲んで食べて、太鼓持ちさんを呼んでお座敷遊びや歌や踊り、お三味線を堪能したいと思った。男性の芸者さんは今も実在されるようだ。
アメリカ映画のように、独身最後のパーティーに男性ストリッパーを呼んでビキニに 1 ドル札を何枚も挟む遊び、またホストクラブなどは、お金を払ってセクハラの免罪符を買うみたいで楽しめそうにない。

この『幇間』という作品は、文章は理解しやすかったが、主人公三平の行動が、どこまで演技で、どこまで素なのか、私は疑いを持った。それで合計 3 回読んだ。

2 回目読んだときも結局、どこまで演技かわからなかったが、最初から最後まで三平の予想通りに彼以外の人々が動いていたのかもしれないと思った。

女に惚れてゾッコンになってもすぐに飽きる、というのは、梅吉への態度も含め、本当は惚れてすらいないのに、惚れた振りなのだろうか。
榊原の旦那に、梅吉と二人きりにして欲しいと言うのも、みんなが彼をおもちゃにすることを想定して切り出した話なのだろうか。

三平は子供の頃、学問が良くできる子だったそうなので、鋭い知性があり、他人の心や行動の先を読むのが、芸ごとと同じくらい得意なのかもしれない。もし他人が皆、三平の思惑通りに動いているなら、彼にとっては随分楽しい人生だろう。三平に支配欲があれば、の話だけど。

3 回目に読んだときは、少し怖くなった。
今まで読んだ小説の主人公は、善良でも自尊心の高さで苦しむ人が多かった。『罪と罰』のラスコーリニコフ、『高慢と偏見 』のダーシーなど。
三平が自尊心を保とうとする描写が私には見つけられず、彼が人間らしさに欠けているようで、恐ろしくなってきた。徐々に地の文の語りも、三平のためにいるロボットのように感じ、この作品がホラーにも思えてきた。

3 回読んでどれも違う感想を持ったということは、この小説は奥行きのレイヤーが多い、優れた作品なのか？
三平にまんまと騙されているような気がしてならないのだが。

（おわり）

メルマガ読者　玉井さん

Animal Video あるいは Audio Visual

AV 男優は非常に過酷な商売である。

その根拠を具体的に述べると、まず体調によりオチン ≪ 中略 ≫ といった訳で AV 男優業は苦労が絶えないのである。これと肩を並べる過酷な商売といえば、本書『幇間』における幇間・太鼓持ちであろう。

そもそも現在、幇間なる職業は果たして存在するのだろうか。

落語研究者・桂米朝氏によると、大阪に幇間は今や一人もおらず、東京の浅草、千住方面に数名現存しているとの事である(※ただこれは米朝氏が存命時分のエピソードの為、現代では絶滅していても不思議ではない)。そうした希少な商売である幇間、その理由は冒頭で述べた通り「過酷だから」に尽きる。まず人間関係ひとつ取ってみても、客⇔芸妓の二者だけで成立する親密な間柄を割って、第三者の幇間が登場、一座を盛り上げて成功報酬を頂戴するのだから面倒である。これを今でいうなら「キャバクラに行ったらホステスだけでなく見知らぬご陽気者がいる状態」あるいは「3 対 3 の合コンに参加したら見知らぬアゲポヨな男がいる状態」といったところか。いずれにせよ、男性客は女性に対する興味・目的があるからして基本、幇間は邪魔であり無用の存在であり違和感でしかなく、その上でさらに場を成立させるためにあらゆる芸を駆使して関係を維持しなくてはならない。左記の説明だとまだ幇間の苦労が分かりづらいかもしれないので、AV 男優に例えると、そもそも視聴者の興味・目的は男優ではなく女優のパイオツ ≪ 以下省略 ≫ 。

「幇間がいなくても成立する関係」であれば、幇間の存在意義とは何なのか、その問題提起ともいえる本書『幇間』では幇間・三平の因果な身の上が終始描かれていて、芸妓・梅吉に恋をしたところで最終的にオチをつけて爆笑を提供しなければならなかったりと、まさに落語『愛宕山(あたごやま)』『鰻の幇間』『たいこ腹』における一八(いっぱち)と同様、終始イジラレっぱなしの負けっぱなし、それでようやく報酬にありつけるかどうか、といった各ステークホルダとの残酷な取引が行われる。これでは誰も後を継がないのも頷ける話であり、本書にはそんな幇間が幇間足り得るための立ち回りが露骨に記されていた。

といったことを考えながら、今回私が一番言いたいのは、オレ達は AV 男優の過酷さを重々承知の上で賞玩せねばならぬということである。

（おわり）

メルマガ読者　hoyo さん

猿山の潤滑剤

コロナ禍以降、もともと尻すぼみであった職場の飲み会というやつは、完全に止めを刺されたような感じだ。

もちろん、お酒を好きな人は多いし、飲食店が完全に潰れたり、飲み会が無くなったりすることは無いだろう。

けれど、厭な上司と付き合いで飲みに行く、などということは、ほとんどなくなったのではないだろうか？

今は無くなってしまった強制参加の（出たくない）飲み会には、幇間のような場の空気を良くする太鼓持ちが欠かせない。

作中の三平と同じように羽毛のように軽く扱われながらもそれでも場を盛り上げる人は、私の会社にも何人かいる。

そういう所謂いじられキャラも、三平くらい Professional にこなすことが出来れば、見事なものだ。

頑張れば頑張るほど、より軽く、より酷く扱われてしまうというジレンマはあるが…

結局、いじりいじられというのは、マウンティングや毛づくろいといった、猿山的な空気がそうさせてしまうのだろう。

誰かがいじられることによって空気が和む。それはそれで必要なことなのかも知れない。けれど、そもそも職場の空気というのは和んでいないといけないのだろうか？

各々のやるべき仕事が明確になっていれば、職場の空気はあまり関係が無いように思う。

けれどもそういう、ドライな割り切りは、日本人には難しいかも知れない。

日本の世間の潤滑剤、幇間のような人々を、軽んじることがないようにしていきたいと思った。

（おわり）

メルマガ読者　チン念さん

『幇間』 感想文

（引用はじめ）

舟が横綱河岸へかかったと思う時分に忽ち舳へ異形なろくろ首の変装人物が現れ三味線につれて滑稽極まる道化踊りを始めました。（中略）、折々かざす踊りの手振りに緋の袖口から男らしい頑丈な手首が現れて、

（引用おわり）

このくだりで、幼少の頃、近くの境内で毎年２月の末頃に伊勢から興行に来る獅子舞の女形(おやま)道中を思いました、中でも二頭の獅子の決闘シーンは迫力満点です、そして、仲直りと称して二頭が合体して、その一頭からお多福顔のおかめの面を被った、綺麗な着物を纏った男役者が現れて、老いも若きも笑いの渦に巻き込まれました。その時、私は幼心におかめ姿をしてはにかんでいる人の腕から光る腕時計を見て、何ともたとえ様のない異様さにビックリしたもんでした。さて幇間の主人公三平を取り巻く榊原や梅吉等の上下関係を見るに榊原は大棚の旦那、それに引き換え昔は海運橋の近所に仲買店を構え榊原とも張り合った商人でしたが放埒な性格が、太鼓持ちに向かわせたのであるが、この性格は、異端者の悲しみ、から引用、162 ページ章三郎は世の中の人間友達に対してこれ以上の親しみを抱く訳に行かなかった人間と人間との間に成り立つ関係の内で、中略、決して相手の人格相手の精神を愛の標的とするのでわない、中略恋人の為よりも自己の歓楽の為に献身的になるのであろう、中略、道徳的センティメントを全然欠いているのみならず、そういう情操を感じ入る他人の心理を解する事が出来なかった、とあるが、事、幇間に関しては違う様に思えるいとも簡単に暗示にかかり最後は好きな梅吉と一夜を供にしていない事を榊原の旦那や梅吉よりなにより三平自身が知っている事は何を隠そう情念が猛り狂う中で理性によって己の自尊心と他者への慈愛をプロフェッショナルな笑いにすり替えたのでしょう。最後に、人間不平等起源論より、『自己愛は一つの自然的な感情でありこれが全ての動物をその自己保存に注意させ又、人間においては理性によって導かれ憐れみよって変容されて人間愛と美徳を生み出す』、とある。もし私の前に吉永小百合が現れ公衆の面前で、裸になれと催眠術をかけられたら、喜んでなりましょう。仮に三平みたいに、一夜を供にして、朝起きれば、そこはブタバコでしたが、世のならいでしょうね。以上、長くなりついでにある伊勢旅行の奇妙な話をします。（最後に転載しました。主宰者）

（おわり）

信州読書会　主宰　宮澤さん

Oh!!　GEISYA　FUJIYAMA　HADAKA　DANCING　ALLNIGHT!!

（引用はじめ）

「えゝ毎度伺いますが、兎角此の殿方のお失策（しくじり）は酒と女でげして、取り分け御婦人の勢力と申したら大したものでげす。我が国は天（あま）の窟戸（いわと）の始まりから『女ならでは夜の明けぬ国』などと申しまする。……」
　と喋り出す舌先の旨味（うまみ）、何となく情愛のある話し振りは、喋って居る当人も、嘸（さぞ）好い気持だろうと思われます。そうして、一言一句に女子供を可笑しがらせ、時々愛嬌たっぷりの眼つきで、お客の方を一循見廻して居る。其処に何とも云われない人懐（ひとなつ）ッこい所があって、「人間社会の温か味」と云うようなものを、彼はこう云う時に最も強く感じます。

（引用おわり）

落語が与える『人間社会の温か味』は、言葉やしぐさの与えるニュアンスやタッチの微妙な表現にある。
　幇間になった三平という男は、そのニュアンスやタッチを、人の何倍も愛おしく思っていて、それを周囲の人間と分かちあいたいのである。それこそが、彼なりのヒューマニズムなのだ。

何作か読んでみて、谷崎文学には一貫して、天の窟戸の前で夜明けを待つ幇間芸の真髄がみなぎっていると思った。
『女ならでは夜の明けぬ国』はおそらく日本文化の、ひとつの核心をついている。

日本の文学には天照大神系統のものと、須佐之男尊系統のものがある。

宴会で酔っての裸踊りという奇態な日本の文化が、サラリーマンの世界にも、地方の津々浦々も色々なバリエーションで持って点在しているが、それとて、天の窟戸を開けてもらうためである。

お腹が痛くなるほど、人を笑わせ、勝ち気な女性の機嫌をとるという幇間の裸ダンスは、正統な日本文化なのである。

これが日本の古典の核心だと、彼なりに掴んだのだろう。

（引用はじめ）

天照大神はかくて、岩戸隠れによって美的倫理的批判を行うが、権力によって行うのではない。速須佐之男の命の美的倫理的逸脱は、このようにして天照大神の悲しみの自己否定の形で批判されるが、ついに神の宴の、烏滸業（おこわざ）を演ずる天宇受売命（あめのうずめのみこと）に対する、文化の哄笑（もっとも卑俗的なるもの）によって融和せしめられる。ここに日本文化の基本的な現象形態が語られている。三島由紀夫『文化防衛論』ちくま文庫　P.78

（引用おわり）

三島由紀夫が『文化防衛論』で解明した神の宴の天宇受売命の裸ダンスは、速須佐之男の美的倫理的逸脱とは別のもうひとつの重要な文化伝統の御柱である。卑俗なものによる文化的エネルギーの再生である。

三平＆ブラザーズの催眠にかかったフリからの『HADAKA・ダンシング・オールナイト』もその文化伝統に連なるのだ。

かくして、大谷崎の日本文化の形式への直観力には、やはい瞠目せざるを得ない。
だから、谷崎・イズ・アメージングなのだ。

（おわり）

チン念さんの感想文の続きの伊勢旅行奇談です。紹介しておきます。

８月の第三土曜当初からの予定の歓迎会を兼ねた伊勢志摩への、一泊２日の始まりです。男女半々の人数で朝の 9 時に出発とあいなりました。折からの暑さ故、クーラーボックスの中はビールありｶﾝﾁｭｳﾊｲありで所狭しと詰められてました。一人の馬鹿がスイカまで詰めこむ始末、そんなこんなで昼頃に伊勢の予約のレストランにつき、ビールや日本酒等々飲み、叉、エビやカニ、取り分け伊勢志摩産のヒオウギ貝、通称アッバッパに、全員した包みをうち、おまけに、叉、あの馬鹿が、この場で、厚かましくスイカを割り皆、お相伴にあづかった訳です。そして昼からは、伊勢神宮や真珠の製作現場等々を見学して、あっと言うまに夕方になり、今夜のお宿の桧扇荘に着き、皆めいめいにくつろいだり風呂に入り、七時からの宴会を待つばかりです。男女皆旅館専用の浴衣に着替え男は、あぐらをかき、女性陣は揃いの浴衣姿で正座していました。そして宴会が、始まるや否や、例のあの馬鹿、私より三年後に入社したのですが、料理が全て整うまで、訳がわからん事をあぁでもないこうでもないとか言って取りなしてました。そして宴もたけなわに差し掛かった時、例の加藤ちゃんのちょっとだけよ、の艶かしいリズムにのって、あの馬鹿、北村君がどこで借りたか、綺麗な着物を着て登場です！会場から、気持ち悪、とか引っ込めまでは、判るが仕舞いに首や挙げ句に死ねと言う罵声まで飛び交い騒然となり、そして一瞬の間場内の照明が落ち、再び照明がともされた時には、北村君は出かパン一つそれもダブダブのをはき、僕は、これしか能がないので、と言うなり裸踊りをおっぱじめました。それも、糞丁寧に腹にヘノヘノモヘジが書かれリズムに会わせ踊る姿が、さも腹のモヘジが、泣いたり怒ったり、はたまた悲しんだりで、全員呆気に取られましたね。社長は茶碗蒸しから椎茸をつまんだまま左手で眼鏡をずらし眼を皿の様に北村君を凝視してました。男性社員は、カニが泡を吹いたみたいな口をアングリあけて見ていて女性陣は、胸のはだけや、裾の乱れを気にする事なく、鳥が飛び立つ見たいにここぞとばかりのかぶり付きです。中でも4月入社したばかりの工業高校を出た 18 歳の丸本君の姿は、2つ席がずれてるとは云え、異様でしたね、と言うのも右手に今にも落ちそうなカニ肉を持ち左手は、アッバッパ、そして口からは火に味噌とも涎とも判らぬ様なモノ垂らし眼は一点を見詰め、何か般若心経をうそぶいている。まあ、そんな中でも北村君は額に玉の汗を浮かべ踊るわ、踊るでいつしかモヘジに髭まで出る始末、そして丸本君は着物君の芸が始まるや否や、北村君の方を見ず、丸本君の眼の先には、当会社のマドンナ順子の姿があった、社長の挨拶もそこそこに、唄や腹芸であっという間に北村君のワンマンショウで終わった。そして、丸本君にそれとなしに、何故順子ちゃんを見詰めたかを聞いたすると、日頃から脚ふぇちのてらいのある彼は、北村さんの演芸が始まるや胸ははだけ、裾はみだれて、比較的胸の谷間に興味がない丸本は、脚ばかりを追いかけたその先の白やピンクはたまた花柄までは良かったが順子さんに眼を向けた時密林に迷い込んだと言う、そして、その奥の柘榴の木に成っている柘榴が盛んに手招きしていた、と言う。私は、薄々承知してましたが、まだ 18 歳で童顔も手伝って、伊勢にきて、良い兆しと、言いましたね　そして、その夜丸本君いわく、酒に酔いつぶれ 10 時頃に寝て、変な夢を見たと言う、その夢は巫女さん姿の順子さんが僕のオチンチンをチョンギル夢です。と言うのも、丸ちゃんそんな所で遊んでないで早くお城にかえってらしゃいと言い帰る帰らないで押し問答していたら、やがて順子さんは上半身を脱ぎ乳房も露にして右手はカニのハサミに変身して巫女に付いてくるかとセマラレテ最後らマラを斬られそうになって、順ちゃんい～くと云った時眼が覚めました。その後、丸本君は３日に一度旅行の時にみた淫夢を見るので精神科で診断の結果アドレッセント、パラノイアと診断され丸本君は私に、そのアドレッセント何やらとは、何かと問われ伊勢で良い思いした罪の報いと、言いましたね、何年かしてマドンナの順子ちゃんも北村の毒牙にかかり、会社を辞し、それと時を同じくして丸本君の淫夢も見なくなった、と言う北村は相変わらずの昼行灯で、結局、一回切りの腹芸で、社長の腰巾着にまでなってしまった。以上。

（おわり）